

問いから観点を決め、物語を読む学習

～宮沢賢治『やまなし』を読む実践を通して～

廣 瀬 修 也

- I はじめに
- II 研究の目的
- III 授業実践から
- IV 実践からの考察
- V 参考文献・引用文献

I はじめに

国語の授業で物語を読む。長きに亘って行われてきた授業スタイルである。登場人物の心情を中心に読む・作者の意図を汲み取って読む・表現の工夫を読む、その読み方は様々である。また、心情曲線・劇化・音読劇や朗読劇・リーフレットや新聞作り・登場人物になりきってインタビュー・日記など、言語活動も多様に行われてきた。授業の方法は多岐に及ぶにせよ、そこには「子どもにこんな言葉の力を身につけてほしい。」という、子どもの実態や授業のねらいを含めた教師の願いがあったはずである。

なぜ、国語の授業で物語を読むのか。以前担任した子どもが「一人で読む時は自由に想像を広げて読める。みんなで読む時はいろんな考えに触れられる。」と言っていたことがある。「いろんな考えに触れられる。」そこを経て、自分の読みが広がったり深まったりすることに意義がある。「同じような考えだけど、根拠が違う。」「まったく思いつかない考えを言っていた。」「視点が変わると、登場人物の気持ちの読みとりも変わる。」など、互いの考えを共有することの楽しさを子どもも教師も感じられる授業をしたいと思う。

多様な読み方や考え方を知ると、それが子ども自身の読書生活にも反映されていく。登場人物の心情一つにしても、国語の授業で学んだことから、「ただ悲しい気分なんだろうなと思っていたけど、この時は切ない気持ちなんじゃないかな。」と、自身の読み方が広がっていく。読み方が広がれば想像も広がり、想像が広がれば日常における人とのかかわりにも変化が起きる。このように、子どもの将来を見すえた授業観をもっていたい。

II 研究の目的

物語の授業を考える時、子どもの問いから読み深めていくスタイルを続けてきた。教師からの発問ではなく、自分たちが考えた問いについて話し合っていくことは、子どもが主体的・対話的に学習に臨めることを実感している。内から生まれる素朴な問いへ向かう時、子どもは大人の想像以上に思考を働かせている。学級内で考えがぶつかり合うと、「発言したい。」と自然に手を挙げる子も出てくる。

次に示すのは、筆者が本校に着任してから行ってきた「子どもの問いから物語を読み深める」授業の一覧である。

教材名	学年	実施年度
注文の多い料理店（東京書籍）	5年生	2014年度
わらぐつの中の神様（光村図書）	5年生	2014年度
風切るつばさ（東京書籍）	6年生	2015年度
海の命（東京書籍）	6年生	2015年度
あいしているから（三省堂）	1年生	2016年度
白いぼうし（東京書籍）	4年生	2017年度
ごんぎつね（東京書籍）	4年生	2017年度
サボテンの花（東京書籍）	6年生	2018年度
雪わたり（三省堂）	6年生	2018年度
やまなし（光村図書）	6年生	2018年度

子どもの問いを中心に授業を進めることには課題がある。問いの種類が多くなりすぎてしまい、全てを取り上げることは時数の問題で難しいことである。そこでは、教師の介入が必要になる。また、出さ

れた問いを分類・整理しなければ、拡散した問いを闇雲に考えるだけの授業になり、結局何を学んだのかわからないで単元を終える危険性もある。

そこで、観点を決めて物語を読む言語活動を設定した。子どもの問いを基にして読みの授業を始めるのだが、その問いから観点を決めて読んでいく。観点を定めることで、考える道筋がはっきりしてくる。

扱った教材は『やまなし』である。『やまなし』は、1923（大正12）年4月8日付の『岩手毎日新聞』に掲載された短編童話である。光村図書6年『創造』の教材として、現代の小学6年生も読んでいます。その独特の表現、つかみどころのない展開から、小学校国語の中で最も難しい教材とも言われている。子どもは「意味がよくわからない。」とつぶやき、教師は「どうやって授業したらいいのか。」と悩む。なぜ、そのように捉えられてしまうのか。

子どもは、ストーリーの流れにそって物語を読んでいくことが多い。その過程には、登場人物の心情に思いを寄せたり、感情移入したりすることもあるだろう。あるいは、情景から想像してその展開を楽しむ。しかし、『やまなし』はこれまでの物語とは異質なものとして子どもたちの前に現れる。かに達のセリフから心情を読み取るのも難しく、情景として描かれているものは、日常であり触れることの無いものばかり。4クラスで『やまなし』の授業を行ったが、どのクラスとも初読の後は「？」という表情を浮かべる子が多かった。

とはいえ、宮沢賢治独特の表現には想像力を掻き立てるものがあり、『やまなし』を読み深めることは、子どもたちの国語の力を高めることにもつながるのではないかと考えた。また、一読して「わからない。」と思った文章に対しても、すぐに投げ出すのではなく、様々な視点から読んでいく経験は、これからの時代を生きていく上でも必要な力となると考え、本単元を構成した。

Ⅲ 授業実践から

1. 学びの履歴

1学期は、『サボテンの花』をグループごとに問いを決めて読んだ。『サボテンの花』は、「生き方」を題材にした物語であり、授業の中で登場人物の生き方に対する考えに焦点を当てた議論が展開された。この学習では、「生き方を考えること」と「叙述をもとにして読んでいくこと」を同時にやっていくことに子どもも教師も難しさを感じた。

2学期は、宮沢賢治の『雪わたり』を読んだ。この物語は、最初に学級全体で問いを決めて、グループごとにどの問いを追求するかを決め、活動を進めた。この時の課題を「様々で独特な表現をいろいろな視点から読み取ろう。一文一文、小さなことでも作者の意図を読み取ろう。」と決め、宮沢賢治独特の表現を味わいつつ、登場人物の心情を読み込んでいった。初読の段階では、ストーリーの流れを捉えることも大変そうだったが、問いについて追求していく過程で、少しずつ宮沢賢治の世界観を味わえるようになっていった。

国語の単元の終了時には、ふり返りを書くようにしている。「最初はよくわからないことでも、みんなが問いを作りながら考えていくと、わかるようになっていった。」「他のグループも教科書のいろいろな表現から想像して考えていた。」と、問いを作ってみんなで考えていくことで、読み深められたと実感している様子も見られた。また、他のグループの発表を聞いて、改めて自分の考えを記している児童もいた。

2. 単元指導計画

- (1) 宮沢賢治の人柄を考える。
- (2) 『やまなし』を通読し、初発の感想を書く。
- (3) 読み解くための観点を決め、観点ごとにグループを作る。
- (4) 観点ごとのグループで『やまなし』を読み解く。
- (5) 追求した内容を、学級全体で共有する。

問いから観点を決め、物語を読む学習

- (6) 学習のまとめ（最初に読んだ頃のこと・観点ごとの追求のこと・共有したこと・宮沢賢治作品の魅力など）として、新聞を作成する。

3. 授業の実際

(1) 宮沢賢治の人柄を考える。(1時間)

5年生の教科書（東京書籍）に掲載されている『宮沢賢治』を読み、自分なりに宮沢賢治についてまとめた。まとめたことを基にして、学級全体で宮沢賢治の人柄を考えた。

- | | |
|--------------------|-------------------|
| ・粘り強い | ・負けず嫌い、最後までやり遂げる |
| ・自然や人を大切にできる優しい人 | ・自然を尊重している。 |
| ・考えたら実行する | ・気が強い |
| ・人々の気持ちに寄りそって考えられる | ・欲がない、他人のために行動する。 |
| ・現代の人を戒める。 | |

ここでまとめた内容を、『やまなし』を読み深めていく時に参考にできることを期待した。

(2) 『やまなし』を通読し、初発の感想を書く。扉ページをつくる。(1, 5時間)

『やまなし』を全員で音読した。音読直後の反応は、「よくわからない。」「どういうこと?」「クラムボンって誰?」初発の感想にも、疑問が多く書かれていた。

- | |
|--|
| ・『雪わたり』より難しいと思います。 |
| ・なぜ、最後の方にしかでてこないやまなしが題名になっているのか。 |
| ・この物語を通して宮沢賢治は何を読者に伝えたいのか。 |
| ・『雪わたり』の時のように何かにとえていていると思った。「金剛石の粉をはいているようだった」「ざらざらする鉄砲だま」等と表すことで、読者によりわかりやすく想像できるようにしていた。 |
| ・この本は、何を読者に伝えたかったのかなどが予想できません。 |
| ・宮沢賢治の、目の前にあるであるような表現力がよく分かる。 |
| ・クラムボンは、読者のとらえ方などによって変わってくる。 |
| ・『やまなし』のまだ具体的ではない所を考えていきたい。 |
| ・とてもきれいに自然の様子が書かれているので、どんな状況にいるのかはよくわかりました。 |
| ・お母さんが出てこないことにも、少し引っかかりました。 |
| ・かへの視点から別世界のようなきれいな谷川を独特な表現を使って表していて不思議な感じでした。 |
| ・別世界の美しさやおそろしさを上手く表現していて読者にも、美しさが伝わります。 |
| ・頭の中が真っ白になってよく読みとることができませんでした。 |
| ・分かるような言葉を出さず、相手に考えさせるようなことが書いてあると思います。 |

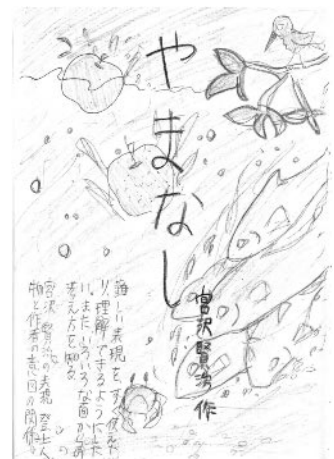
初発の感想を書いた後に、扉ページをつくる。物語文や説明文の授業の導入では、扉ページをつくるようにしている。導入時に考えていることを単元の学習に生かすことをねらいとしている。

【扉ページの内容】

- | | | |
|----------------------|------|----|
| ・物語の題名 | ・作者名 | ・絵 |
| ・この物語を読むことで、高めたい国語の力 | | |
| ・みんなで考えてみたいこと | | |

「この物語を読むことで、高めたい国語の力」を集約し、学級としての単元のめあてを決める。

「この物語を読むことで高めたい国語の力」は、自分が何のために学習するのかを明確にすること、「みんなで考えてみたいこと」は、物語を読ん



でいくための問いを自分たちで作り出すことをねらいとして書いている。

(3) 扉ページに書いた内容を基にして、学習のめあてとテーマについて追求するグループを決める。

(1時間)

○学習のめあて

扉ページに書いた「この物語を読むことで高めたい国語の力」を発表し合い、学級としての学習のめあてを決めていく。子どもたちの書いた内容を分類すると、大きくは「表現のこと」「登場人物のこと」「作者のこと」に分類できた。これらをまとめて、次のめあてを決めた。

「物語に出てくる表現の意味や力、登場人物の考えや気持ちを読み解き、作者のメッセージを受けとろう。」

○追求するテーマ

扉ページに書いた「みんなで考えてみたいこと」を基にして、「クラムボン」「やまなし」「やまなし(題名)」「五月と十二月」「表現の工夫」「登場人物」「宮沢賢治」という7つのテーマごとにグループを作り、学習のめあてを念頭において追求していった。

(4) テーマについて、グループごとに追求する。(3時間)

追求を始める前に、どういった方針で進めていくのかを教師に報告した。

例えば「やまなし(題名)グループ」(4名)は、「そもそもやまなしとは何なのかを調べ、本文のやまなしと照らし合わせ、やまなしが物語の中でどのような役割を与えたのかを考え、なぜ題名がやまなしになったのかを追求する。」という方針で追求を始めた。

教師からは、次のことを子どもたちに話した。

a 学習のめあてから離れすぎないこと

⇒追求方法の中で、「やまなし」に関係する本を調べる等、インターネットの情報を探すとというのがあった。興味をもって調べていくことはいいのだが、何のために調べているのかを見失うことのないように注意を促した。

b 本文の表現に考えの根拠があること

⇒物語を読む上で、想像を広げていくことは大切なことである。しかし、自分勝手に想像していくと、本文の表現からかけ離れたものになってしまう。あくまで本文の表現に立ち止まって考えることを話した。このことは、国語で物語を読む上でとても大切なことであると考えている。

c 一つの答えを求めすぎないこと

⇒明確な答えを求めるのではなく、追求の過程を楽しむこと。『やまなし』について追求していく内に、「わからない、もうクラムボンって何!？」という声を挙げる子もいた。自分の中で納得のいく考えが生み出されるよう、追求していくことを話した。

国語の時間だけに限らず、グループで追求する際に教師がどのようにかかわるのかを考えなければならない。上に示したのは、それぞれのグループが追求を始める前に話した内容である。aは調べ学習の過程において、内容が拡散しすぎてしまわないようにするためのもの、b・cは国語の授業で物語を読む時に大切にしておきたいと、筆者が常々考えていることである。

調べ学習が始まると、各グループがどのように追求を進めているかを見て回る。行き詰っている雰囲気を感じたら、「何に迷っているのか。」「今どこまで進んでいるか。」「どのような資料を使って調べているか。」等と、声をかける。

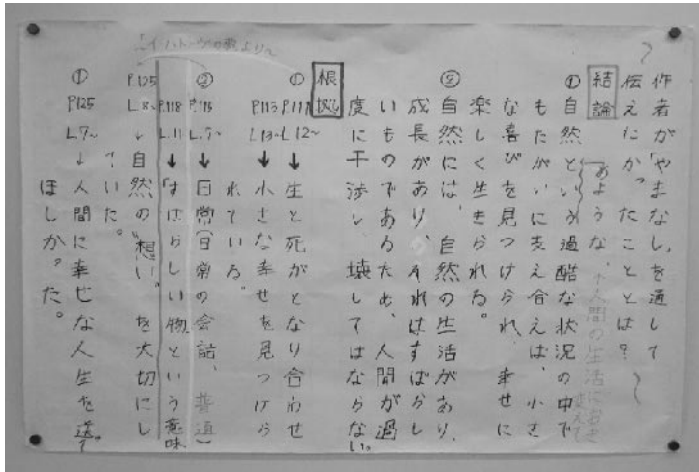


図1 追求内容をまとめた模造紙

左に示したのは、「やまなし（題名）」グループが追求内容をまとめたものである。ほとんどのグループが、追求内容を模造紙にまとめている。これは、今までの学習経験から模造紙にまとめて発表することに慣れていること、また一目で追求内容を把握することができることが理由だと考えられる。話し合った内容全てではなく、必要なことだけをまとめていることから既習の学びを生かしていることがわかる。

追求途中には、例えば次のようなやりとりが展開されていた。※「やまなし（題名）グループ」

C 1	教科書にも載っていたけど、「魚はこわい」って言ってるじゃないですか、ここで。	C 3	え、2つって食べると食べられる側？
C 2	「こわい」って言ってるから、間違いなく恐怖心を与えた感じじゃないですか。	C 2	食べる食べられると、あと恐怖心と。やまなしが与えた気分って、何て言えばいいんだろ？
C 1	かわせみが恐怖心を与えた。やまなしは、 <u>ケンカの仲裁みたいなこと</u> をしたじゃないですか。だから、なんていうの、ここではかに達の心情はあまり出てこないけど、 <u>穏やかないい気持ちでやまなしを追ってたんじゃないかと私は想像しているから、そういう面では、（かわせみとやまなしは）対照的だと思います。</u>	C 4	嬉しいとか？
C 2	もしさ、やまなしが出てこなかったとしたりずっとケンカしてたと思う？	C 1	穏やかとかか。
C 3	でもなんか、かわせみが止めてたんじゃない？	C 2	穏やかとかか、平和とかか。
C 4	<u>テーマは、「なぜ、やまなしが題名になったのか」</u> だから、そう、そこにちゃんとつなげていかないと。	C n	え～！？
C 1	かわせみってさ、かに達は何してる時に入ってきたんだっけ？	C 2	そこまでいかないか。
C 2	かわせみが与えた影響は恐怖心。で、何か物を食べる側ってことでしょ？	C 4	楽しみなことができたじゃん、お酒が飲めるから。
C 1	食べると食べられる側	C 3	明日への希望みたいなこと？
C 2	今2つ出たね。 (右上へつづく)	C 1	プラスなこと。
		C 2	プラスだけど。
		C 4	ポジティブ？
		C n	う～ん・・・。
		C 2	やまなしが与えた、かに達の希望ってこと。自然の恵みが来たってことじゃない？
		C 4	あ、自然の恵みが来て嬉しい。
		C 2	なんかさ、かわせみは自然の恵み...自然の資源を食べるでしょ。
		C 4	食物連鎖。
		C 1	理科？食物連鎖って。
		C 2	自然の恵みとか資源を、やまなしは与える側だけど。

冒頭で、C 2が叙述から考えたことを発言している。さらに、C 1が「ケンカの仲裁」と叙述には無い表現で言い換え、自分の想像したことについて発言している。この場面では、「叙述を基にして想像を広げて読む姿」が表れている。C 4は、テーマ（厳密に言うと、テーマではなく問い）が何であったのかを確認し、話している内容をまとめるように意識できている。グループ内での対話記録を改めて読む

と、これまでの国語の学びを生かしながら追求している姿に気づくことができる。

(5) テーマについて、グループごとに発表する。(5.5時間)

追求した内容を、画用紙や模造紙にまとめ、学級全体に対して発表する。

発表グループは、発表資料に書かれた内容だけでなく、追求の過程で話し合った内容についても話す。発表時間が限られているので、聞き手からの質問や意見を受ける時間を設け、さらに自分たちが話し合った事について説明する。

聞き手は、漫然と聞くのではなく、「疑問に思ったことを質問する、自分たちが追求した内容と重なる部分はないかを考える、発表グループと聞き手とのやりとりの中で、新たに考えついたことを話す」ことを意識して聞くように促した。

a クラムボン

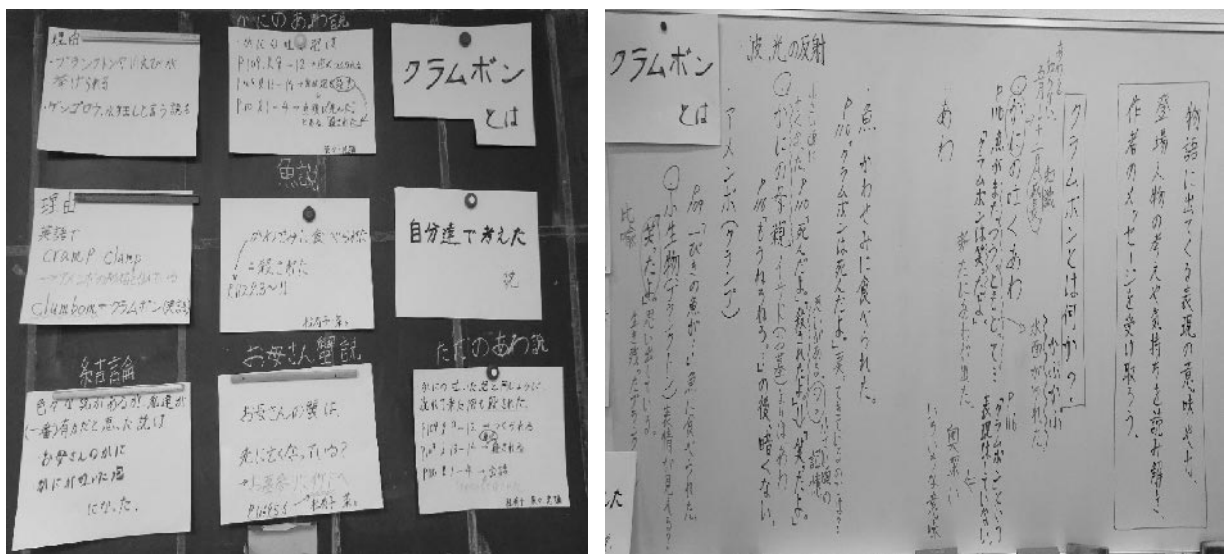


図2 「クラムボン」グループの発表資料と板書

このグループが提案したのは、「かのにのあわ」「あわ」「魚」「かのにの母親」「アメンボ」「小さな生物」である。追求途中で問題となっていたのは、インターネットで調べた情報についてである。『やまなし』に関するサイトは数多く、クラムボンについて言及したものも膨大にある。これまでに、多くの人々がクラムボンの正体を解明しようとしてきたことがわかる。グループの一人が、サイト上にある情報に拘っていたのだが、他のメンバーは、「サイトにある情報はあくまで一つの説だから、鵜呑みにするのは駄目じゃない？」と話していた。

発表した後の質疑応答では、「かのにの吐くあわ説」「かのにの母親説」「小さな生物」に、話題が集中した。

- ・116ページのあわくらべでは、かのにの吐くあわのことを「クラムボン」という表現をしていない。あえて「クラムボン」という表現をしないことで、奥深いいろいろな意味をもたせようとしているのではないか。
- ・かのにの兄弟は五月と十二月で成長している。五月はまだ「あわ」のことを知らずに「クラムボン」と表現しているのではないか。
- ・「カブカブ」とは水面がゆれた様子を表している。
- ・イサドとはかのにの母親のお墓だというが、かのにの兄弟は「イサドに行くこと」よりも「あわくらべ」のことに気が向いている。もし、クラムボンが母親でイサドがお墓だというなら、「イサドに行くこと」を優先するのではないか。

授業の最後に、自分がどの説に納得がいったかを教師が問い、挙手で意思表示をした。議論が集中した3つの説に納得という子が大半である中、「波や光の反射」ではないかという声も挙がった。(議論を聞いて考えついた意見である。)

b やまなし (物語の中に出てくる実)

追求テーマを決める際に、「やまなし」は2つのグループに分かれた。「物語の中に出てくるやまなし」と「題名になっているやまなし」である。本グループは「物語の中に出てくるやまなし」グループである。

このグループはまず、植物である「やまなし」について調べ、説明している。その後、「五月」と「十二月」を比べることで、物語における「やまなし」の意義を提案した。

「五月」と「十二月」を比較し、「弱肉強食⇔自己犠牲」「命をうばう⇔つなげる」「利己的⇔利他的」と対になるキーワードを挙げている。この対比については様々な意見が出された。

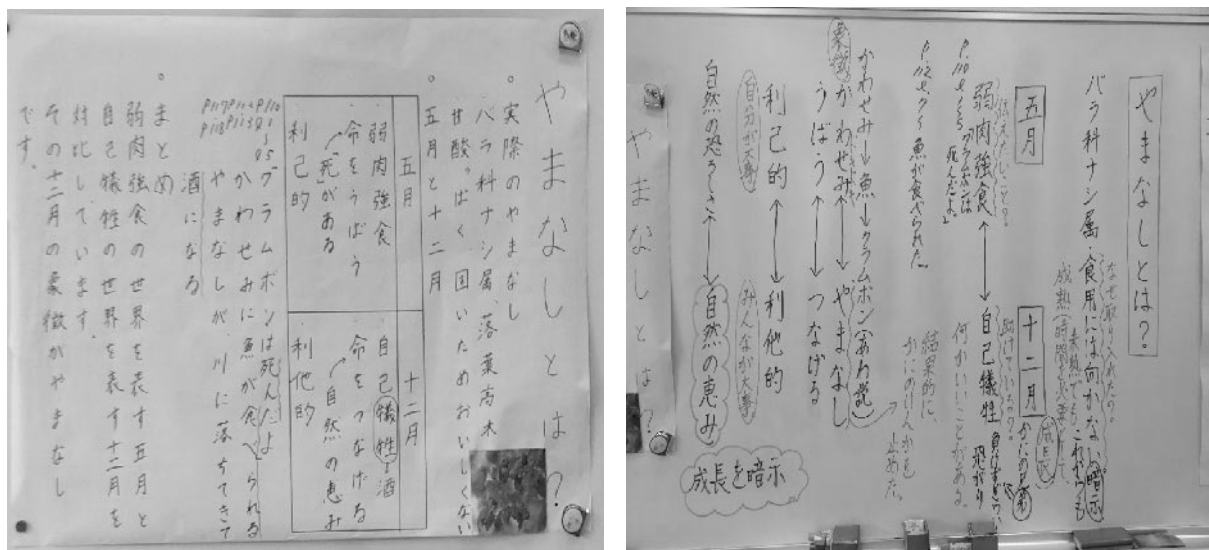


図3 「やまなし (物語に出てくる実)」グループの発表資料と板書

- ・弱肉強食という意見はわかる。「クラムボンは死んだよ。」「魚が食べられた。」という描写があるから。けれど、自己犠牲というのがわからない。「やまなし」は誰かを助けている？
- ・利己的、利他的という考えには違和感がある。
- ・「やまなし」が食用に向かないと最初に言っていたけれど、なぜ宮沢賢治は物語の中に「やまなし」を取り入れたんですか。
- ・「やまなし」は、食用に向かないけど、物語の中では時間が経ってお酒になる。最初は未熟でも成熟していくという、生き物の成長を宮沢賢治は言いたかったのではないか。かこの兄弟も「五月」から「十二月」にかけて成長している。(前時に話したかこの兄弟の成長と絡めた発言)
- ・「成長」といったけど、かこの弟は負けず嫌いで恐がりなところは、「五月」と「十二月」ではあまり変わっていないのではないかと思います。(聞き手同士の質疑応答がなされている。)

c やまなし (題名)

やまなし (題名) グループである。このグループは、「なぜ、『やまなし』という題名なのか。」という問いを立てて追求していた。まず、「かわせみ」と「やまなし」を比較することから始め、「食べる⇔食べられる」「恐怖心⇔安心感」「自然の恐ろしさ⇔自然の恵み」というキーワードを考え出している。また、やまなしがかにや谷川の生物たちに幸せを与えていること、「食物連鎖」の世界だった五月から、や

まなしの登場によって、「未来への幸福」が生まれた十二月、というように、やまなしの意味を説明することを通して、題名になったことを主張した。

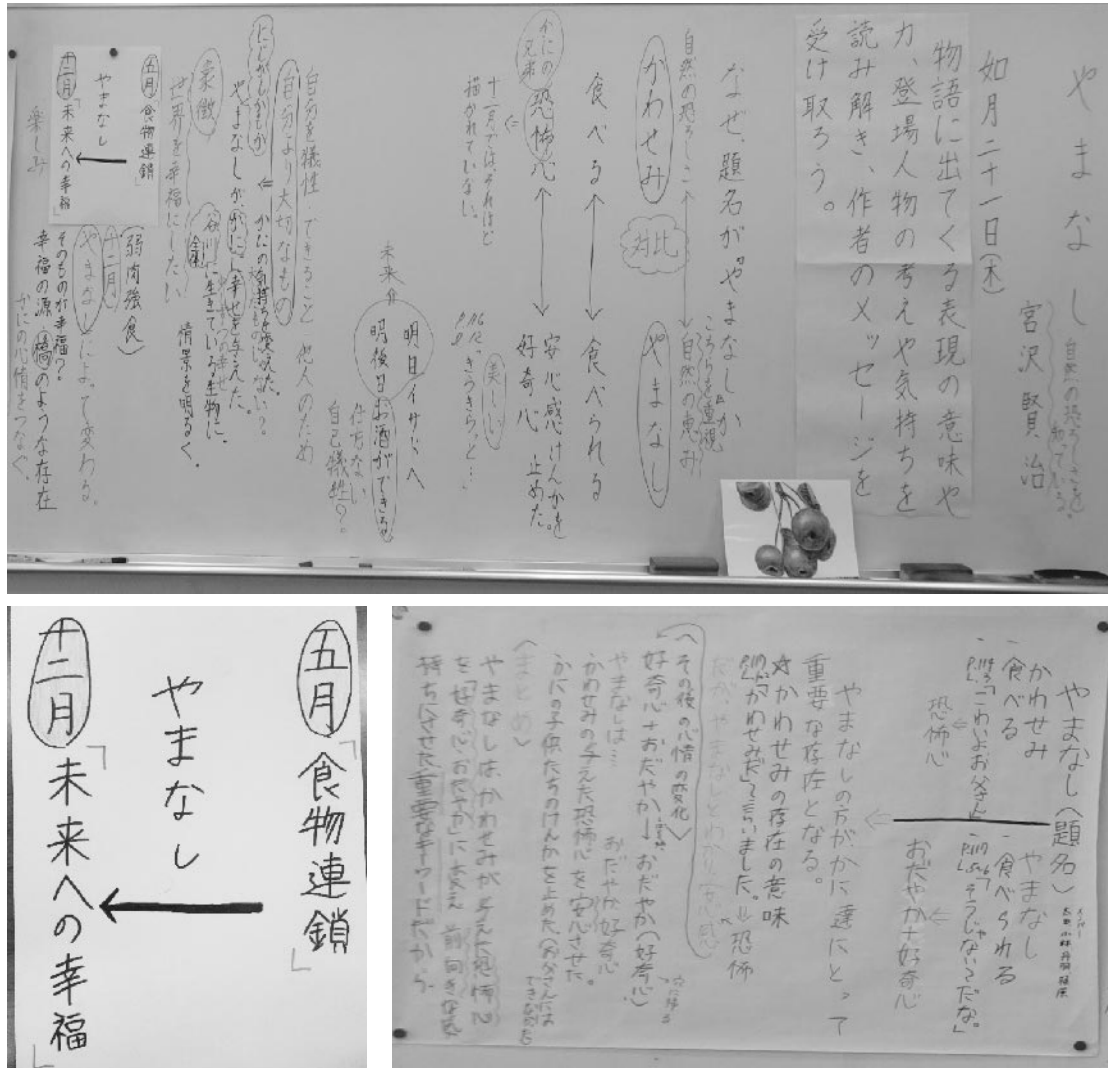


図4 「やまなし (題名)」グループの発表資料と板書

- かわせみは自然の恐ろしさみたいなのを表していて、やまなしは自然の恵みみたいなのを表しているって話だったと思う。『イーハトーブの夢』のまず1行目からの部分で、宮沢賢治って生まれた年から、津波や洪水や地震、様々な災害に見舞われた時代だった。宮沢賢治は、身の回りですごい大きな災害が起こって、その恐ろしさをすごい感じていたと思う。題名を「かわせみ」ではなく「やまなし」にすることによって、かわせみみたいな自然の恐ろしい面もあるけど、でもそれよりも自然の恵みの方を重視してくれないか、そういう投げかけの意味みたいなものがあるんじゃないか、という捉え方もできる。
- 発表の中で、自分より大切なものを見つけるって言っていたけど、例えば、この物語でも、自分の生活でもどっちでもいいんだけど、具体的にどういふものか。
- やまなしはかにも子どもたちのけんかを止めたのと、その、かわせみが与えた恐怖心を安心させたってことで、ここから、物語にやまなしが出てくることで、情景っていうかわからないけど、雰囲気少し明るくなって、谷川の底っていうか、谷川に生きている生き物たちに、幸福を与えたってことだと思う。

d 「五月」と「十二月」

「五月」と「十二月」を比較したグループである。「かわせみとやまなし」「かのにの成長」に焦点を当てて比較している。

「かわせみ」が暦の上では五月頃に活動が活発になること、「やまなし」は暦の上では十二月頃に実がなることから、なぜ「かわせみ」と「やまなし」が物語上に登場するのかを説明した。

「かのにの成長」について、「五月」はかのにが小さい（二ひきはまるで声も出ず、居すくまっしまいました。）こと、「十二月」はかのにが大きい（子どもらのかには、首をすくめていました。）ことを示している。下線の表現を比較し、「すごくこわがっている」から「少ししかこわがっていない」ことを主張した。

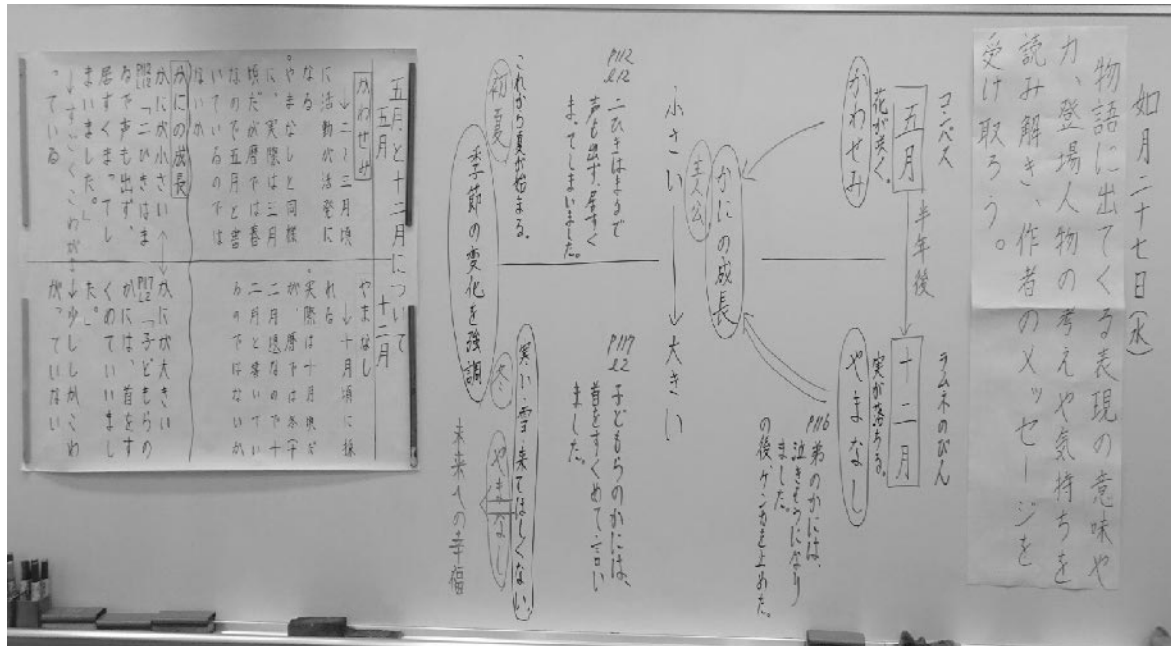


図5 「五月」と「十二月」グループの発表資料と板書

- かわせみ、やまなしともにかのにの成長に関わっていると思う。やまなしは、かのにの兄弟のけんかを止めている。
- 「五月」と「十二月」は、季節の変化も強調しているのではないか。「五月」は初夏のイメージ、「十二月」は寒い、雪、来てほしくないというイメージ。
- 「十二月」は、暗いイメージがあるけど、やまなしが出てくることで、未来への幸福をイメージできる。（前時のグループが発表したこととつないだ発言）

e 表現の工夫

『やまなし』には、宮沢賢治独特の表現が散りばめられている。このグループは、その表現を挙げている。

◎色に注目

- ・青白い水の底
- ・青く暗く鋼のように
- ・銀の色の腹
- ・日光の黄金
- ・金の光
- ・黒く静かに
- ・波が青白い火を燃やしたり消したり

◎宮沢賢治の『表現の方法』に注目

- ・なめらかな天井
- ・夢のように水の中に
- ・真っすぐなかげの棒が
- ・光をまるっきりくちやくちやくにして
- ・お口を輪のように円くして
- ・ラムネのビンの月光
- ・ぼかぼか流れていく
- ・金剛石の粉をはいているよう
- ・鉄色に変に底光りして
- ・底の光のあみ
- ・きらきらっと黄金のぶちが光りました

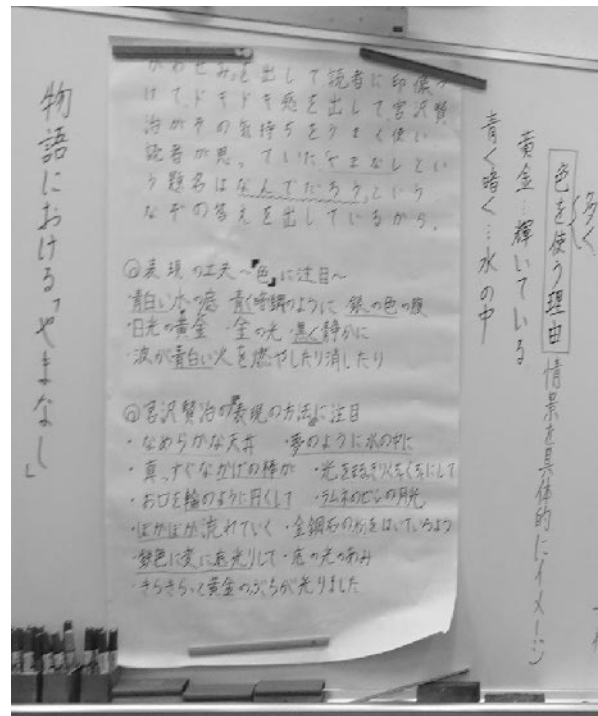


図6 「表現の工夫」グループの発表資料と板書

色を使うこと、独特の表現を使うことによって、情景を具体的にイメージすることができることをねらっているのではないかという主張。

- ・前の時間にも出てきたけど、「五月」と「十二月」で表現の仕方が変わっている。
- ・「五月」の表現は、どこか暗い感じ、「十二月」は明るいイメージ。
- ・かへの兄弟の視点で描かれた表現ではないか。
- ・「○○のように」という表現が多い。

授業者としては、表現についてももう少し詳しい議論をしてほしかったが、前時までの内容とつなげるような発言に終始した。

このグループの発表が終わった時に感じたことがある。後のグループになればなるほど、物語に対する考えが増えていき、なかなか新しい考えが生み出されにくいということである。発表された内容に対して、ただ質問や意見を繰り返していただくだけでは、この状況は打開されないのではないか、何か新しい手立てが必要なのではないかと考えるようになった。

f 登場人物

「登場人物」を観点にして追求していたグループの発表。これまでの物語文の授業では、「登場人物の心情を考える」ことを主な目的とした読解をすることが多かった。しかし、『やまなし』に出てくる登場人物の心情はつかみづらく、追求し始めた時には戸惑っている様子も見られた。

このグループは、まず主人公が誰なのかを考え、誰の視点で描かれた物語なのかを追求している。その後、登場人物の考えや気持ちについて叙述から考えている。

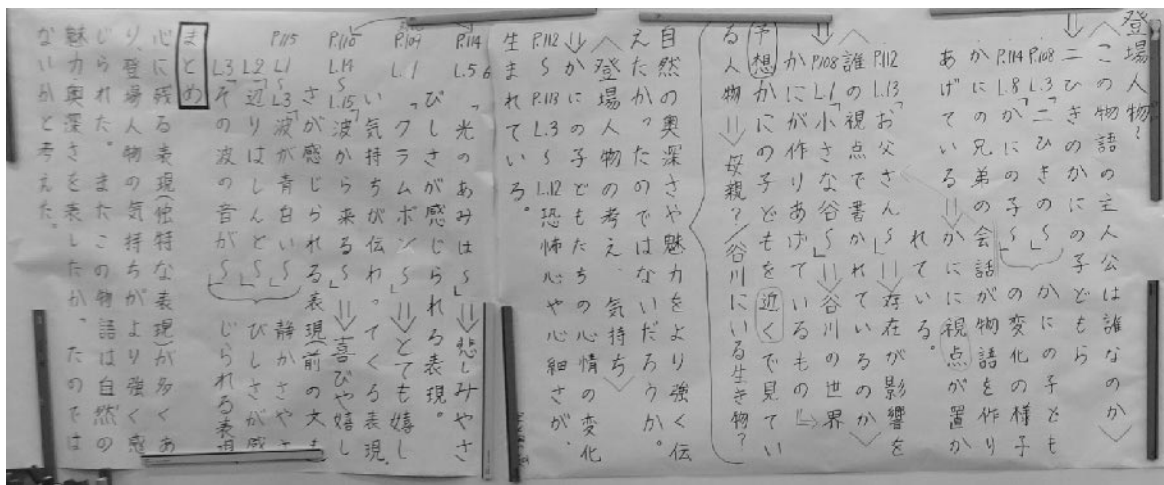
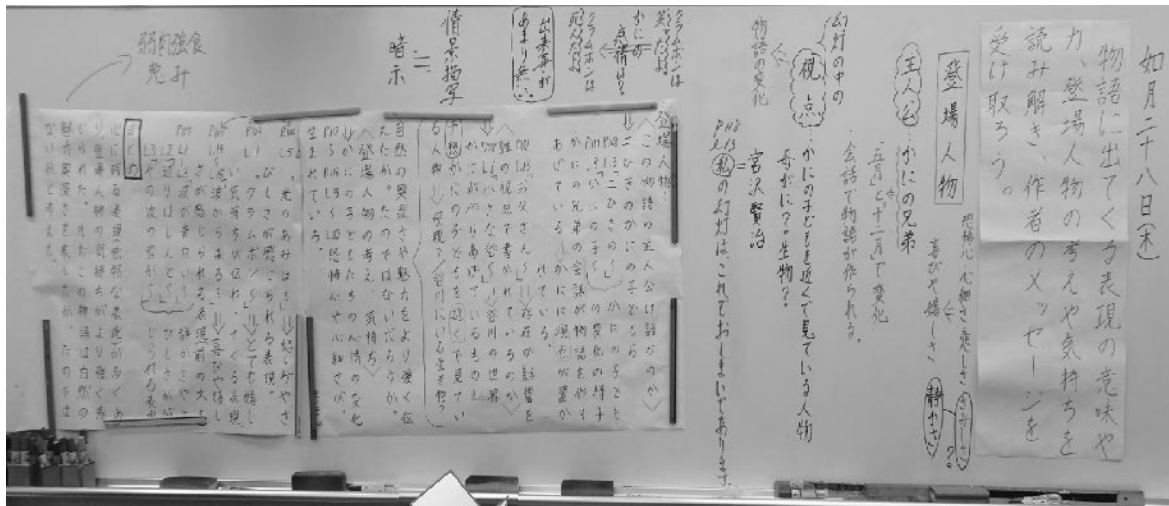


図7 「登場人物」グループの発表資料と板書

- 出来事があまり無いから、登場人物の心情の変化がわかりづらい。
- このグループが言っている叙述は、暗示的なものが多い。
(ここで、授業者が「情景描写」の説明をした。) ※学習用語の提示
- 「五月」の場面で、「クラムボンは笑ったよ。」から「クラムボンは死んだよ。」と進んだけれど、この時のかに達の心情は？
- まとめにある「自然の恵み、奥深さ」は、前のグループが言っていた「弱肉強食」や「恵み」とつながるのではないか。

g 宮沢賢治

宮沢賢治の人柄や理念を追求することを通して、賢治が『やまなし』を通して伝えたかったことを発表したグループ。「自然・助け合い・生と死・小さな喜び」といったキーワードが出された。叙述から「自然」には、良さだけでなく厳しさもあるという意見も出されている。

また、『イーハトーブの夢』から、賢治の自然に対する思いも読み取っていた。

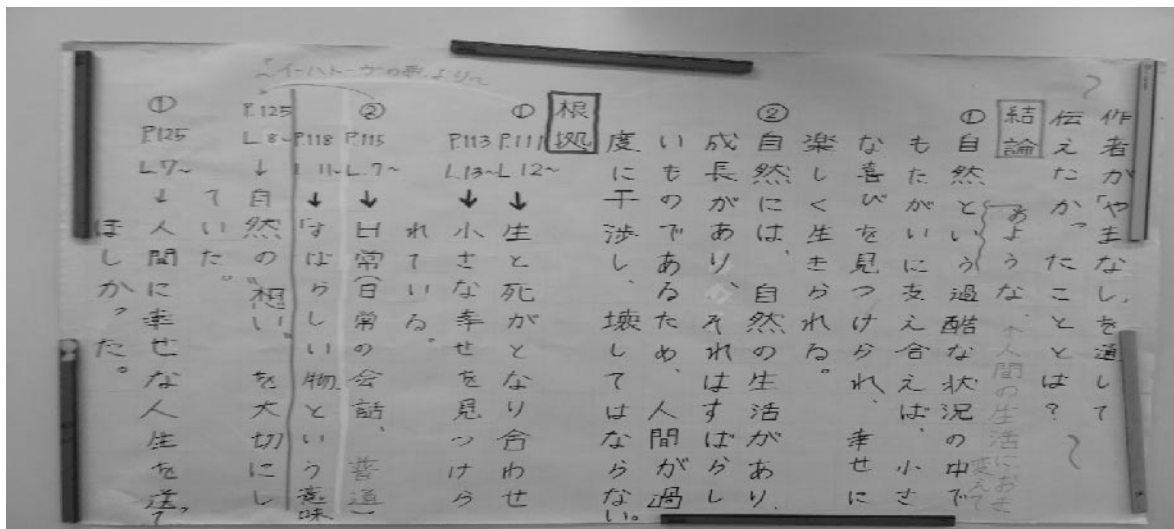
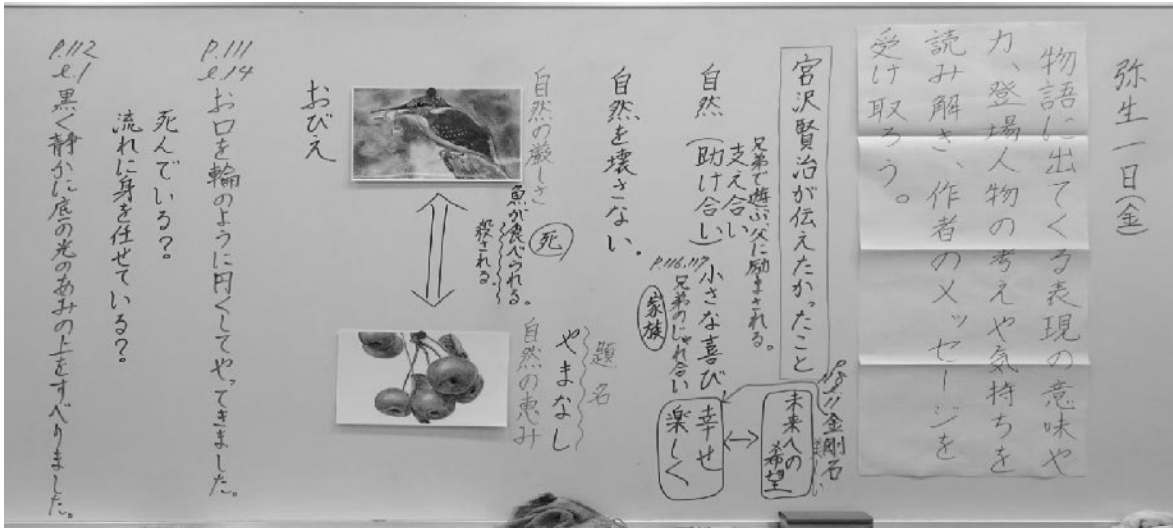


図8 「宮沢賢治」グループの発表資料と板書

- 118ページ11行目の金剛石から、「幸せ」とか「楽しい」ということが読み取れる。
- 「幸せ」「楽しい」は、前の時間までに出た「未来への希望」にもつながるんじゃないか。
- かわせみは「自然の厳しさ」、やまなしは「自然の恵み」を表している。
- 人間に幸せな人生を送ってほしかったというのは納得。

これまで発表したグループと共通する内容もあった。7つの観点に分かれて追求・発表したけど、どこかしらつながる内容があることを教師も子どもたちも実感している。「自然の恵みや厳しさ」「自然との共生」「未来への希望」「喜びや幸せ」といったことを、宮沢賢治は伝えたいのではないかと、授業の終盤でまとまっていた。

(6) 学習のまとめとして、新聞を作成する。(2時間)

どのように単元のまとめを行うか。6年生の国語では新聞を作る活動は行ってこなかったが、5年生までの学習や他教科で新聞をたくさん作ってきたこと、単元のふり返しとして盛り込みたい観点を1枚にまとめるには新聞が良いこともあり、このような形でまとめを行った。

必ず書く観点は以下の通り。

- ・最初に読んだ時の感想と、今の感想 ⇒単元を通した学びの変化をふり返る。
- ・テーマごとに追求したことについて ⇒グループでの追求が自分にとってどうであったかふり返る。
- ・追求した内容を共有してみても ⇒発言しなかったとしても、何を学んだかをふり返る。
- ・宮沢賢治作品の魅力 ⇒「よくわからない。」と感じた中でも魅力はないかをふり返る。
- ・最初に自分が考えた問いとそれに対する考え ⇒全員の問いと考えを共有する機会を確保する。

右の児童の新聞は、単元を通して学びが深まったといえる例ではないだろうか。

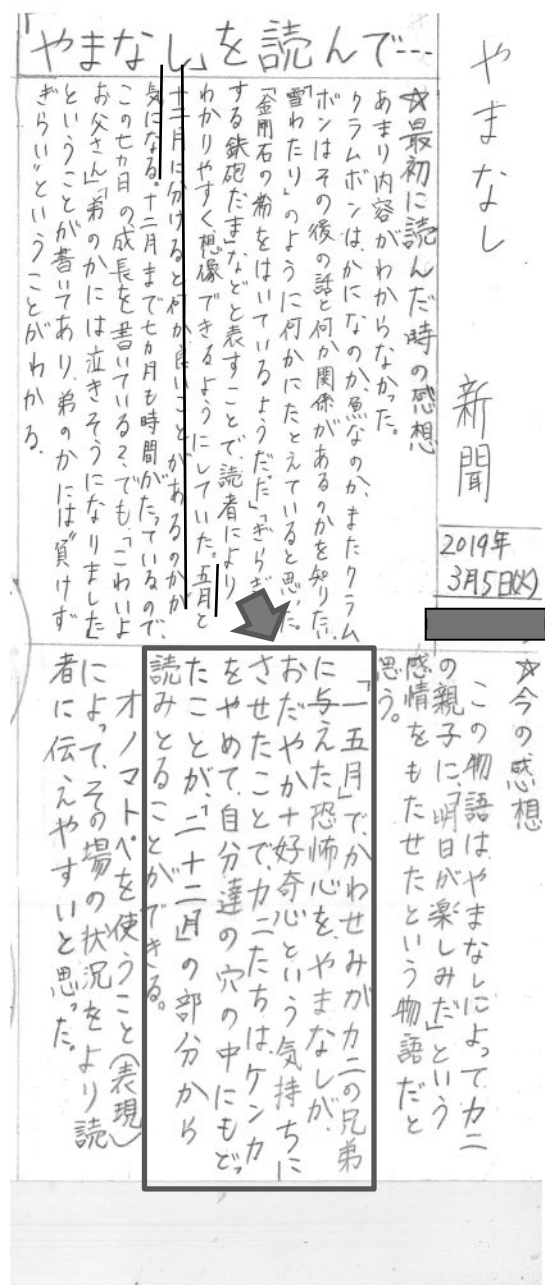
最初に読んだ時は、「五月と十二月に分けると何か良いことがあるのかが気になる。」と書いているが、今の感想では、「五月と十二月」に登場するかわせみとやまなしの物語における意味について考えられている。

また、やまなしがかにの兄弟に与えた影響についても言及しており、追求内容の共有を生かして単元をふり返っていることがわかる。

その他の追求内容の共有についてのふり返し

- やっぱり人と考えを共有すると、本当に深くなると思った。みんなの考えを聞いて、2倍3倍4倍と自分の考えの幅が広がったと思った。
- 自分のグループ（宮沢賢治）で出した結論はすぐれていると思っていたのに、全体の発表を聞いていたらそんなものが的外れだったと思った。お茶小で6年間育った28人が本気で考えた末の結論はすごいな～と思った。

- 特に気になった事は「クラムボンとは何か」についてです。話し合いで出ていた説の中では、泡の説が一番有力なのではないのかと思います。私はもう一つ説を考えてみました。それは、「自然そのものである」ということです。自然が殺されたり笑ったりする事は、宮沢賢治からのメッセージで自然にはこわい所もいっぱいあるけれどきれいで美しい所もあるのだから嫌いにならないでという事かなと考えます。



IV 実践からの考察

1 観点ごとに読み進めること

物語を読むための指針があると、子どもも読み進めやすいという考えもあり、本実践を行った。教師が観点を全て提示する方法もあると思うが、本単元では子どもからの意見を踏まえて観点を決めていった。6年生の3学期であることや、これまでの学びの履歴から、子どもの声から授業を構成していくことが、より子どもたちの学びになると判断したからである。

本単元を通して、観点ごとに読んでいった成果がいくつかある。

まずは、観点ごとに分かれてグループを作り追求していくことは、一つのテーマを切り口としてより詳しく読み解いていくことになったことである。『やまなし』は確かに難解な物語かもしれないが、読み解いていくためのきっかけをもつことで、6年生なりの読みができていくことを実感した。もちろん、その読みにはこれまでの国語の授業で学んだことが生かされている。

さらに、追求内容を共有する中で、違うテーマでも追求した内容が重なることがわかった。例えば、「宮沢賢治」という人物について追求したグループが、なぜ『やまなし』という題名をつけたかについて言及し、「やまなし(題名)」グループの追求内容と重なったこと等である。複数の追求内容を共有することによって、物語の主題にもせまることができることを感じた。

2 宮沢賢治の作品を、国語の授業で読むこと

本実践の前に、宮沢賢治作の『雪わたり』を学級全体で読んだ。オノマトペの効果や宮沢賢治が伝えたかったこと等、『雪わたり』の読解が『やまなし』の読解に生かされる場面もあった。また、グループの追求を始める前に、全グループに『イーハトーブの夢』(光村図書6年)を渡した。『やまなし』を読むにあたり、物語だけを読む方法と、宮沢賢治の資料や他の作品を事前に見た上で読む方法がある。本実践では、かなり詳細に読んでいくことをねらっていたため、事前に資料を提示した。物語そのものに読み浸ることを視野に入れるならば、『やまなし』だけを読解していくことも考えられる。

「農学校の教師をしていたとき、賢治は生徒たちに、「人間はなぜ生きているのか」と問いました。だれもが答えられずにいると、賢治はみずからその問いにこたえていいました。「なぜ人間は生きているのか——ということを考えるために生きているのだ。」作家賢治は、「なぜわたしが生きているのかを知りたい。という心から「やむにやまれず」創作の筆をとったのだといえましょう。」(西郷竹彦, 1994, p.95 - 96) とあるように、宮沢賢治作品を読むことによって、子どもたちが自分の生き方まで思いを馳せられることも考え、本実践を行った。

3 今後の展望

7つのテーマを共有していく内に、議論する内容がほぼ似通ってきてしまった。テーマを少なくするか、議論の仕方に工夫が必要であることを感じた。また、宮沢賢治の物語だからこそ学ぶことができたことを、子どもが言語化することには課題が残る。例えば、「他のグループの意見を聞いて、考えがより深まった。」これは他の物語の授業でもできることである。国語の授業で物語を読む時、その物語だからこそできること、子どもが高められる国語の力について今後も考え続けたい。

V 参考文献・引用文献

- ・石田佐久馬(1986)「国語科問題作り学習の実践」明治図書
- ・石田佐久馬(1986)「国語科問題作り学習のすすめ」明治図書
- ・恩田逸夫(1971)「賢治童話の読み方―「やまなしを中心に」―」『解釈』1971年3月1日号 教育出版センター
- ・西郷竹彦(1971)「虚構としての文学」国土新書

- ・木俣敏（1986）「『やまなし』（宮澤賢治）をとおして－教材研究のあり方」『教育評論』通巻474号 日本教職員組合情宣局
- ・塩田勉（1987）「上級文学教材としての童話－宮澤賢治『やまなし』をめぐる－」『早稲田大学語学教育研究所紀要』34：66～75
- ・国語教育研究所編（1992）『国語教材研究大事典』明治図書
- ・黒田英津子（2011）「学びをデザインする力を育てる『やまなし』を科学する」『第47回日本国語教師の会「櫛の会」富士山大会要項』日本国語教師の会富士山大会事務局
- ・八田幸恵（2008）「リー・ショーマンのPCK概念に関する一考察：「教育学的推論と活動モデル」に依拠した改革プロジェクトの展開を通して」『京都大学大学院教育学研究科紀要』54：180～192
- ・井上陽童（2018）「〈揺らぎ〉を生かした国語科授業研究（その2）－宮澤賢治『やまなし』の実践を通して－」（全国大学国語教育学会東京ウォーターフロント大会発表資料）
- ・今泉洋子（1977）『『やまなし』の世界』『賢治研究19』宮沢賢治研究会
- ・福島章（1971）「質問教室『『やまなし』には何故母親が出てこないのだろうか？』での討論の報告」『賢治研究8』宮沢賢治研究会
- ・佐々木俊幸・西尾一（1986）「文責批評による『やまなし』への道」明治図書
- ・渋谷孝・市毛勝雄（1987）「読みを深める授業分析 全授業記録と考察」明治図書
- ・須田浅一郎（1988）「賢治文学登攀『やまなし』をもう一度読む」『賢治研究46』宮沢賢治研究会
- ・関可明（1990）「一読総合法による『やまなし』の指導案」『現代教育科学No. 405』明治図書
- ・西郷竹彦（1994）「宮沢賢治『やまなし』の世界」黎明書房
- ・鶴田清司（1999）「文学教材の読解主義を超える」明治図書
- ・山中吾郎（2003）「文芸研の授業①文芸教材編『やまなし』の授業」明治図書
- ・田守育啓（2010）「賢治オノマトペの謎を解く」大修館書店
- ・栗原敦（2014）「宮沢賢治のオノマトペ集」ちくま文庫